

【分科会 13】当事者といっしょに考えるリカバリーと看護

若林幸子(NPO法人 こころの森)

安田香里(医療法人同仁会 海星病院)

若林隆志(医療法人同仁会 海星病院)

東美奈子(社会福祉法人 ふあっと)

当事者を中心とする看護を展開するためには、看護師が回復過程を知り、看護の役割について考えることが必要である。しかし、現状は医療機関で看護師が会える当事者は病状が重く長期入院をしていたり、入退院を繰り返しているなかなか回復しない人であることが多い。

今回、退院すると不安が強くなり病状悪化を繰り返しながら地域で安心して暮らすことが出来なかったが、多機関多職種によるアウトリーチ支援を受け不安定ながら単身生活3ヶ月を経過した当事者と退院6ヶ月後のイベントとしてこの分科会に参加した。きっかけは「若いころ住んでいた東京に行ってみたい」という発言であり、本人の希望に沿った支援のひとつである。

そこで、退院に不安でいっぱいだった気持ちが入院したくない気持ちに変化した状況など自分の気持ちをそのままの言葉で発表してもらい、その回復過程の中からリカバリーの視点で看護師が出来ることについて考える機会をもちたいと思った。

企画者としてリカバリーの視点で大切にしていることは、①当事者中心、②当事者のペースで関わる、③あきらめずに介入する、④関係づくりのための工夫をする、⑤社会(地域)のなかで生きる(活きる)ということであったが、当事者からの発表では、①自分の希望に沿って支援を組み立ててくれることや何でも話せる関係の人がいることが勇気になる、②自分の希望する支援が受けられることがうれしい、③いつでも必要な時に訪問してくれることで不安が少なくなる、④訪問してそれぞれの支援者が自分の得意技で関わってくれることがうれしい。それは人と人としての関わりだと感じる、⑤自分が退院して良かったことを伝え、その人が退院したり、退院後に病棟の看護師が「いい顔しているね。来てくれてありがとう」といってくれてうれしい、などという発言が聴かれた。

また、「看護」という部分では「看護師が家で足浴をしてくれたことでイライラがなくなったし、その日は気持ちよくてぐっすり眠れた」という声が聞かれた。これは、不安まっただ中にいる時に提供した看護技術が役立つエピソードだと感じる。

当事者からの発表や企画者からのポイント整理を経て、グループワークに入ったが、なかなか「リカバリーの視点で看護師ができること」というテーマまでには至らず、お互いに自分のおかれている現状を報告し情報共有をしてグループワークは終了した。

しかし、看護師にとっては当事者や家族の貴重な話が聴ける良い機会になったし、リカバリーという視点をもつきっかけづくりにはなったのではないかと感じている。

《東美奈子(社会福祉法人ふあっと)》